よかネット
YOKANET

No.72　2004. 11
㈱よかネット

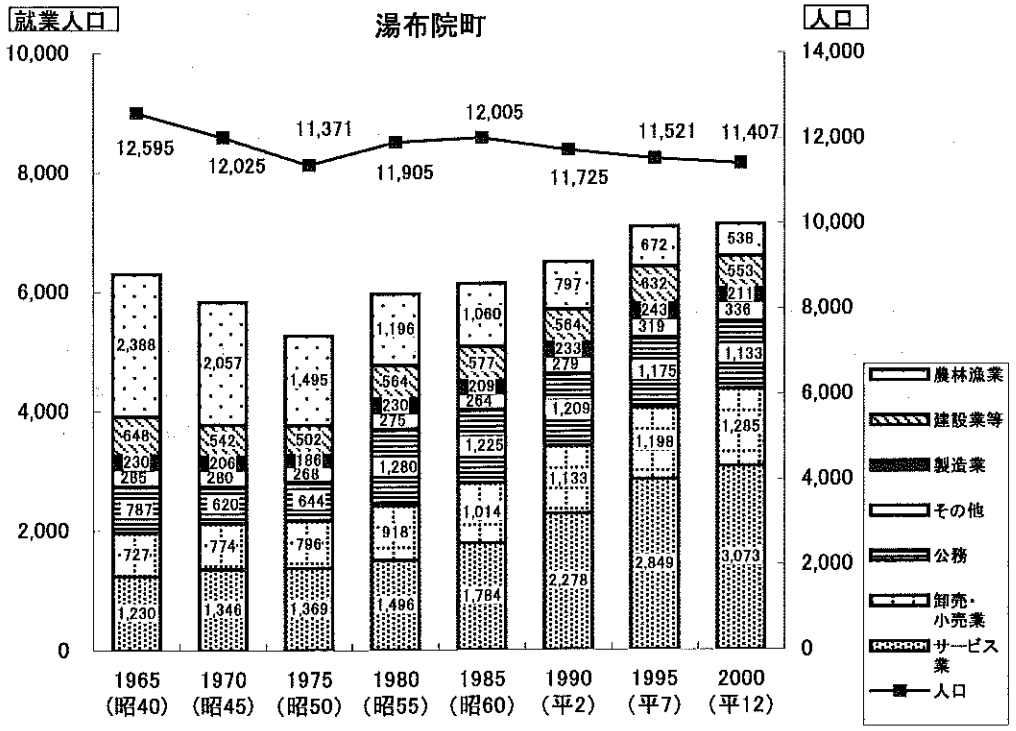
もくじ

NETWORK
ソフト化・サービス化へひた走る松江の観光　その二
－市長のメールマガジンに
「松江市は観光が主産業で裾野の広い産業」－ …… 2
公園のシンボルをみんなでつくろう～管理を続ける編～ …… 6
第２回・第３回市街化調整区域、地域づくり研究会報告
地域集落の活力維持を考えた郊外居住とは？ …… 9
自分たちが楽しみながら地域の魅力づくりをしている
糸島地域づくりなんでも相談会第６回報告 …… 12
地域ゼミ報告
今までより史跡・遺跡が身近なものに思えた …… 14
友人、知人に自慢したくなるほど水城の歴史を知る
～水城セミナー第１回報告～ …… 15
皆様から寄せられた「よかネット」へのご意見、近況などの紹介 …… 17
見・聞・食
足湯もスタンドも盛況です～対馬市厳原「漁り火の湯」～ …… 18
漁船団と一緒に海から見た「みあれ祭」 …… 19
まち歩き
周りにお堀が２重、３重に取り囲んでる古墳
～御塚・権現塚古墳～ …… 21
千年家の“法燈”と独鈷寺の“独鈷・鏡”－福岡県新宮町－ …… 22
本・BOOKS
日本の川を蘇らせた技師デ・レイケ …… 23

●観光の振興が地場産業を支えている？

“地域で働いている人”の推移を見てみると、湯布院町では人口は減少しているにもかかわらず、通勤流入があるので、1975年以降増加を続けている。

変曲点となっている1975年は、町の産業が衰退する中で、地域の人たちが「ゆふいん音楽祭」や「湯布院映画祭」などに取り組みだした時期とちょうど重なっている。観光関連の産業が多いサービス業と卸売・小売，飲食店が地場の産業の下支えになっているようだ。（本文2頁関連記事）



サービス業は多岐にわたっており、必ずしも観光業と一致していない。しかし観光関連の産業はサービス業に含まれるので、それを取り上げてみた。サービス業の細分類では経年変化のデータがとれなかった。

サービス業の主な業種＝洗濯・理容・浴場業、駐車場業、生活関連サービス業、旅館業、映画などの娯楽業、自動車整備業、機械・家具等修理業、物品賃貸業、情報サービス業、法律等の専門サービス業、事業サービス、廃棄物処理業、医療業、小中学校等の教育業

その他＝電気・ガス・水道業、運輸・通信業、金融・保険業、不動産業

資料：国勢調査

ソフト化・サービス化へひた走る松江の観光　その二

―― 市長のメールマガジンに「松江市は観光が主産業で裾野の広い産業 ――

糸乗　貞喜

●一つで三役をこなす観光インフラ･前回の話

５月の“よかネット”69号に、松江の観光の取り組みは、グリコのように「一粒で二度おいしい」スタイルになっていると書いた。この号が届いたすぐあとに「あれは宮岡寿雄という市長が……」という手紙が、神戸の友人から来た。彼は宮岡さんが神戸市に在職されていて、ポートアイランド博覧会の事務局長をしておられた頃に、民間会社から事務局に出向していて、一緒に働いた思い出を話したかったのである。

69号に書いたことは、堀川遊覧船が“遊覧”という遊びと、お客様が移動できるという“インフラ機能”とを兼ね備えているということである。もう少しいうと、遊覧船の船着き場が観光の拠点になっていて、そこには公的核テナント（小泉八雲記念館・カラコロ工房・島根ふるさと館）があって、その周辺に民間の土産物店・飲食レストラン・美術館などがある。もうひとつ、堀川の外側に延びた市営バスのシステムがあり、それが外縁部の拠点をつないで観光客にサービスし、その地域の観光開発を担っているという話である。

今回は、①前回ふれられなかった宮岡前市長の話、②松浦現市長の産業政策、③観光のハードインフラの概要、④観光産業の仕組みを支える(財)松江市観光開発公社、⑤観光の日常化の様子、⑥観光の経済効果、などについてふれていくことにする。

●成功するイベントと儲かるイベントは違う。つまりイベントを企画するときはどこを儲けさせるのかを考えることが大切なのだ……宮岡寿雄前市長

前回松江に行って堀川遊覧船に乗り、ぐるっと松江レイクラインのバスでフォーゲルパークに行った時、「一寸おかしい」と思った。この施設が民と公の相乗りになっている感じがしたので、受付の人に確かめた。観光に対する取り組みが半端ではないような気がしたのである。バスでホテルに帰ってすぐにフロントの人に、「この都市の観光は誰が考えたのか」と聞いてみた。「前の市長は神戸市の助役だった人でしてね……」と聞いて、「なんていう人ですか」というと「宮岡市長です」と返事が来た。この時、「ひょっとすると知っている人かもしれんな」と思った。

出張から帰って、インターネットで調べてみて合点が行った。

「松江に虹を架けた男宮岡寿雄遺稿集」(山陰放送刊)という本がある。これをすぐに取り寄せて読んだ。これに載っている経歴によると、1930年隠岐郡知夫村生まれ、松江中学卒、神戸市役所、神戸大二部卒、1976年神戸市経済局長、1980ポートアイランド博事務局長兼務、1981助役、1993松江市長、2000逝去、となっている。この本は、生前に取材を受け、木村尚三郎氏との対談も終え、出版の運びになっていたものである。

見出しを拾ってみると、健全な赤字と不健全な黒字、行政が持つべき“大きな算盤”の発想、魅力的な観光都市は住民が暮らしやすいまち、まずは「五時間滞在できるまち」を目指せ、美術館や文化施設も民間が維持管理する時代、成功するイベントと儲かるイベントは違う、バス交通をまちづくりの中心に、市民も観光客も楽しめる“レジャーパーク”などがある。

「成功するイベントと儲かるイベント」という話は、神戸市での体験をもとに出てきたものである。少し長いが引用させていただく。

「私は、神戸ポートアイランド博の事務局長を務めるなど、さまざまなイベントに携わってきたが、これによって地域を活性化させるのは考える以上に難しいものだ。たとえば神戸ポーアイ博では、全180日間の会期で1､600万人のお客を集め、337億円の収益をあげた。神戸市は90億円の剰余金を得て、地方博ブームの先駆けと言われたものだが、これですべてがうまくいったというわけではない。」

「確かにイベント自体は大成功だったが、周辺のレストランや観光施設が潤ったかというと、そうではなかったのである。はるばる訪ねてきた人

も、みんなポートピア内で遊ぶだけで、外に出て他の施設に行くということがほとんどなかったのだ。考えてみれば当然で、入場料に2000円も3000円も取られれば、その中で出来るだけ楽しんで“モト”をとろうと思うのが人情というものだ。わざわざ外の観光施設まで行くのは面倒だし、お金も勿体ないと考えても何ら不思議ではない。」

「ただし、全国からお客が押し寄せたからホテルだけは潤った。つまりイベントを開催する時は、どこを儲けさせるのかを考えることが大切なのだ。イベントによって多くの人が集まったからといって、すべてが潤うわけでもないし、それで成功というわけでもないのである。」

「繰り返すが、行政にとってイベントは、ただ盛り上がればいいと言うものではない。特に他の地域から呼んでくるときはなおさらで、どこを儲けさせるために開くかを慎重に考える必要がある。そうでないと一見大成功だったイベントが、実際には外部の業者ばかりが儲かって、地元にはほとんど経済効果をもたらさなかったということにもなりかねない。」

民間人以外で、これほどはっきりと、ビジネスの視点でものを言う人は少ない。神戸ポートアイランド博覧会の経験を大切にしているのだろう。69号の原稿でもふれたが、松江の観光は交通インフラとキーテナントを公的施設で作り、それ自体をペイさせようとしながら、周辺の民間施設の商売を考えている。極端な話をすれば、民間が儲かって税金を納めてくれるようにするならば、もともと税金で運営されることになっている役所は、赤字を出しても良いのである。

逆に、何十万何百万人も集めても、地域の人々にとって車の渋滞などで迷惑が降りかかり、商店や飲食店にメリットがなければ、税金を何千万円も使ったというだけのことで、役所の自己満足だけにしかならない。

松江というところは、何となくその辺りに対する気配りが感じられる。

●“うろこの家”と私

宮岡市長のことを書いたので、少し横道へずれさせていただく。

オイルショックのあと観光客が減った頃、神戸市から「有馬温泉のことを考えよ」という仕事をさせていただいた。調べてみると1977年(S52)の夏のことである。その頃「別の話なんですが一寸相談にのってくれませんか」と観光課から電話があり、訪ねてみると観光課の人が「北野の異人館を借りて一般に公開して、観光の要素として売り出したいんですけどね、借りている間に痛みがひどくなったりして問題になると困るので、人がたくさん入っても問題がないかどうかしらべてもらえませんか。とにかく見積もりしてくれませんか」といった。

「松江に虹を架けた男 宮岡寿雄遺稿集」(山陰放送刊)

一緒に異人館（うろこの家）へ行ってみると、屋根も壁も鱗状にカットされた天然スレートで覆われた、落ち着いた洋館だった。内部の床には立派なカーペットが敷き詰められていた。「見積もりといっても、室内の壁や床をはがしてもいいのですか」「いや、これは借り物ですから、カーペットも端をめくるぐらいならいいが、剥がすのはまずい」という話である。見積もりの組み立てようもない。

こういう曖昧で訳のわからん仕事は、是非やってみたい。私は一計を案じた。友人でカンのいいNさん(大阪万博の大屋根の構造をやった人)に相談してみようと思ったのである。「見積もりをするといっても難しいし、この条件では金をもらってするわけにはいかんでしょう。金を貰うと責任が生じますから。タダならやってもいいでが。」といって別れた。翌日「申し訳ないけど、タダでやってもらえますか」と電話がかかってきた。「分かりました」といって、すぐにNさんに電話して事情を説明し、「帰りに一杯飲ますから、つき合ってください」といって予定を組んだ。

連絡を入れて、二人で出かけた。観光課の人が見守る前で、Nさんが「糸乗さん、一寸そこで飛び上がってみてくれますか」私が飛び上がって降りる。「一寸音が悪いですね、ここは入らないよ

うにしましょう」といって、ポールパーティション(金色の腰までぐらいのポールをビロードの紐で繋いだもの)をたてた。二階の部屋をそれぞれ回って、飛び上がったり足をドンドン踏んだりした。「この部屋は音がいいですね」とか「この部屋は半分まで」とか、「二階に同時に上げるのは、20人以下ぐらいにしてください」といって、無料の点検は終わった。二人で三宮で一杯飲んで帰った。気になっていたので、一般公開して一月ぐらい経った頃、私一人で見に行った。問題は起こっていなかったが、少しゆるんでいるように感じた。

うろこの家が公開されたのは昭和52年10月のことである。ＮＨＫのテレビドラマで風見鶏の館をやっていたのも、同じ10月のことである。この頃に、頑丈そうな顔の経済局長に１～２度会っている。それらはすべて、その年の夏から秋のことだった。

神戸という街について印象を聞くと、今では「観光都市だと思います」という人がいる。しかし、神戸は港湾都市であり、港湾都市というものは、横浜が京浜工業地帯の要であり、神戸が阪神工業地帯の、長崎が三菱重工のというように、工業に偏った都市であった。もちろん港町としてのハイカラなイメージはあった。しかし、観光課の仕事は有馬温泉だった。都市産業としてお金を稼ぐために人を呼ぼうとしたのは、この年の洋館観光が始めてといってよいと思う。その転換の過程で、私の足踏みの雑音も混っていたのかも知れない。もちろん全体のシンフォニーは神戸の街と市役所で、タクトは経済局長が握っていたのだろう。

●観光振興していくことが市内の産業振興につながる……松浦現市長

「今の市長も観光に熱心ですよ」と、話を聞かせていただいた企画課と観光課の人たちが言って、松浦市長のメルマガのプリントをくれた。

「市役所の中に産業プロデューサーという制度をつくり、今月からスタートすることになりました。M電器ＯＢのＩさんという大変適任者にお願いすることが出来ました。……今回の産業プロデューサーの一番の仕事は、足で課題や要望を把握することです。もちろん一人で活動するのではなく、スタッフを組織して活動してもらいます。そして、実行可能なことはすぐに実行していきます」

●松江市メールマガジン●○●○○○○○○○○○○○○○○○○○○●第48号●

○●○　だんだん　かわら版　○●○

2004/07/05

○●○●○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○●○●○
●○●○○○○○●「だんだん」は「ありがとう」という意味の出雲弁です●

◆◇目次◆◇◆

◇松浦市長からのメッセージ
産業プロデューサー

◇松江市の動き
「松江市青少年支援センター」オープン
首州市でも松江を宣伝して

◇お知らせ
松江市職員募集
参議院議員通常選挙
おすすめ観光イベント情報
子育て支援センターから
広報まつえ7月号発行

◇ちょっといい話
八雲がたどった道　その二

松浦現市長が出しているメルマガの目次

「松江市は観光が主産業です。したがって、観光を振興していくことが市内の産業振興につながっていくと確信していますが、自然にそうなるものではありません。新産業や新製品を創出するなど、足腰の強い産業を育成すると同時に、観光との連携を強めていく。そのためのプロデュースをしてもらいたいと思います。」

現市長の視点は、単なる人気取りの“人寄せイベント”などにではなく、はっきりと産業・雇用におかれているように思った。

今後の方向として、八束郡の７町村との合併により約20万人の人口になるが、観光重視は変わらない。現在約500万人の入り込み客をベースに、「1,000万人誘客観光構想」を掲げている。

もう一つ松江市は、奈良・京都に並んで「松江国際文化観光都市建設法」が制定されている（Ｓ26年、この法律は全国で３都市のみ）。この法律の第一条（目的）に「ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の文筆を通じて世界的に著名であることにかんがみて……」と述べられている。市町村合併後は、広がった松江市が対象になるようだ。

松江に行ってとにかく感じることは、ラフカディオ・ハーンがよく働いている、働かせているということである。熊本や神戸への滞在は松江より長い。にもかかわらず、松江のことを最も多く書いているし、愛着も表現している。一方では、松江の人々が最も大切にしているようにみえる。昔から“もてなし都市”だったのだろう。

●観光の経済波及効果はどれくらい

観光の経済波及効果の出し方は次のようになっている。

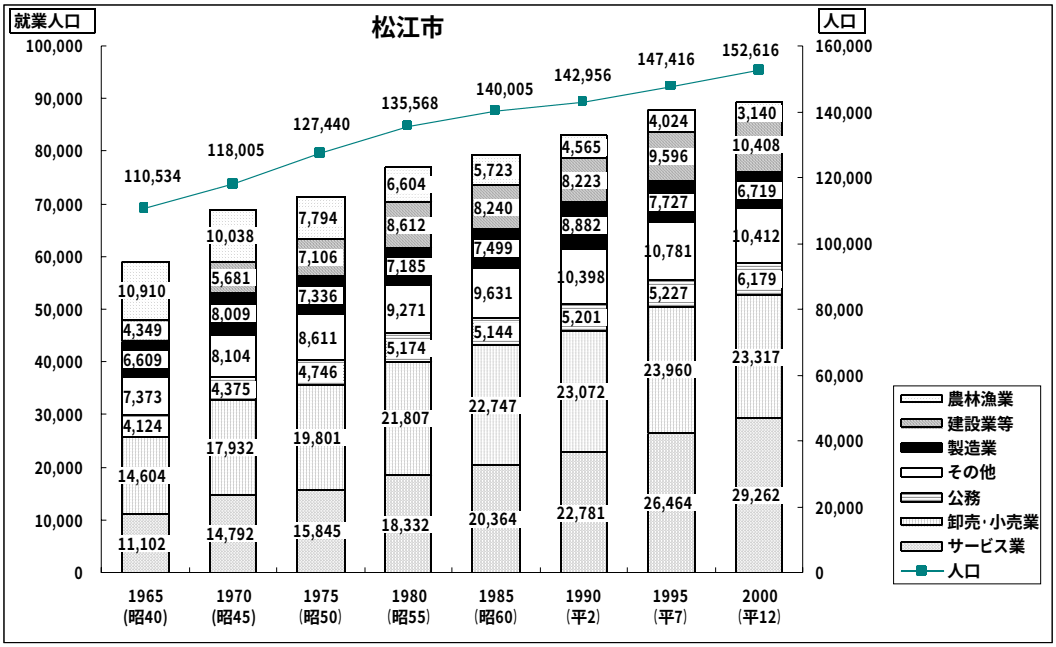


図1 松江市のサービス業は急成長 グラフの説明は表紙参照

出典:国勢調査

①観光客数を調べる
②消費支出額をアンケートなどで聞く
③観光消費額＝①×②
④消費額は仕入れに回されて生産を増加させる一次波及、さらにそれが消費・生産と回る二次波及(産業連関表で見る)などとなり経済効果が分かる、となっている

松江市では③が342億円、④の誘発率が1.18なので誘発額は403億円とされている。これが市の観光課からいただいたデータだが、私はもっと単純に考えてみたい。

この72号の表紙に考え方の概要を載せているが、産業活動の結果は必ず雇用に現れるものとして考え、従業者数の推移を示したものが図１である。

このグラフからは島根県東部の広域中心都市として、常に卸小売業の従業者が首位を占めてきたが、1995年からはサービス業がトップになっている。伸び率が常に一番であったサービス業は、1990年代になって遂に、基幹産業になったとも言えよう。

「サービス業は観光関連だけではない」といわれそうである。まさにその通りで、気になっているところだが、観光関連業種を含む一応のデータの、経年変化を見ることが出来るのはこれぐらいである。先程の観光客の内の、比較的はっきりしている宿泊観光客数の変化と対比してみれば、少しは判断に使えるかも知れない。

出来れば数都市のデータを重ねてみれば、何らかのことが言えるだろう。都市の性格によって、ほとんど宿泊が発生しない観光都市の場合は、ダブルカウントにならない調査をして、観光消費額のデータで考えればいいのではないか。

※観光関連サービス業(近年データの補足)

	1989年	1994年	1999年 (人)
72洗濯・理容など	1538	1896	2087
75旅館・宿所など	1318	1706	1875
76娯楽・スポーツ	986	1108	782
80映画・放送など	435	466	665
82情報サービスなど	491	690	808
84専門サービス	1644	2578	3243

松江市のサービス業統計の数値の内、観光に関係がありそうなものを取り出した。この10年間に、75は557人増の1.42倍、82が約2倍、84(土木建築･法律･会計･デザイン･学習塾など含む)も2倍となっている。観光とは割り切りにくいかも知れないが、都市型お世話サービス系の増加が著しい。

もう一つの経験を述べてみる。

７年前ぐらい前に、長崎県壱岐の観光について調べたとき、当地のａ.旅館・ホテル・民宿、ｂ.飲食店、ｃ.小売業、ｄ.製造業、ｅ.建設業などに対して、雇用・原材料などの仕入先が壱岐島内か島外かについて聞き取り調査をしたことがある。

・宿泊売り上げの内の材料費割合　35%
　そのうちの島外仕入れ率　0～50%
　　→したがって0～17.5%になる
・営業費の島外依存率　0～20%
・人件費など　ほとんど島内

ということであった。これらを勘案してみると、

概ね60余％から100％が島内仕入れと見てよいと考えられた(中間をとって80％としておく）。その次の消費段階の問題として、家計対応消費費目の島外仕入れについて聞いてみた。「そんなものはみんな島内じゃ」という意見もあったが、教育費や情報文化費などもあるので、そういうわけにはいかない。話し合いの中の私の判断として、80％ぐらいと思った。としてみると壱岐島内波及効果は0.8の乗数効果の計算でよいことになる。

つまり壱岐島内への消費・生産波及は、４倍(0.8の乗数)ということになる。遠慮して島内消費率を66％と見ても乗数効果は3.0となる。

何がいいたいかというと、観光産業という曖昧な産業分野で、観光入り込み数、観光客の消費調査のデータだけで、広域の産業連関表をつかって説明するのは、無理があるように思う。また、広域の連関表では、地域内消費率が低く出るのではないかと思う。

結論としていうと、松江の観光産業は、過小評価されているのではないかと思ったのである。

【追記】松江の観光産業の要になっている、(財)松江市観光開発公社のことにふれるスペースがなくなった。以下は次号に回したい。③観光のハードインフラ、④観光産業・基幹産業のシステムインフラの役割りを果たす(財)松江市観光開発公社、⑤巨大イベント主義でなく観光の日常化へ（夏の夕日が見える間は開館中という県立美術館、縁結火＝男女の申し込みを受けて上げる打上花火、ボランティアガイドなど)

（いとのり　さだよし）

公園のシンボルをみんなでつくろう

～管理を続ける編～

伊藤　聡

住民の手による公園のシンボルづくり、花壇と日時計の製作が行われた福岡県稲築町の稲築公園。３月に完成してから、毎月第１日曜日の午前中は『花壇作業の日』として維持・管理作業が続けられている。（公園づくりの様子は「よかネット」No.68,69参照）

昨年、住民と町職員28人で「元気にさかせ隊」事務局が結成され、ここが中心に花壇づくりなどの計画を行い、実際の作業の時には住民を集めて一緒に汗を流してきた。行政の方は、企画財政課のまちづくり係が担当となっている。我々はそこにコンサルタントとして関わってきた。

●咲き終わった後の花殻を摘む

毎月の作業の日は、主に咲き終わった花殻摘みと草取り、ごみ拾いなどをやっている。今のところ、毎回20～30人くらい集まっている。心配したより住民のマナーがいいのか、ごみは思ったほど落ちていないし、雑草も目立つほど生えておらず、それには大した労力はかかっていない。「元気にさかせ隊」のメンバーが作業日以外にも日常的に気に掛けている、という部分が大きいだろう。

意外と毎回大変なのが花殻摘み。たくさん咲いて花壇が賑やかなほど、花殻摘みが大変になる。花が終わった後、花びらが落ちるものもあれば、そのまま黒ずんでいくものもある。パンジーなどは花びらがしおれると見た目が汚くなるだけでなく、雨などで葉にくっついたままにしておくと病気の元になる。

花殻摘みをするのは、枯れた花を取るというためだけではない。植物も生き物だから、子孫を残すことが重要な目的になる。つまり、花をそのままにしておくと種や実が付いてそこに養分がまわり、植物は目的を達成してあまり花を咲かせなくなる。花殻を摘むということは、種や実になる部分を取って、まだまだ花に咲いてもらおう、という作業なのである。花にムチを打っているようだが、実際これで花は再び咲き始める。もし来年種から育ててみるつもりなら最後に種はできるし、特殊な交配でできた品種ならどうせうまく育つような種は取れない。

●水やりはローテーションで

月１回の作業日とは別に、日常的に気をつけないといけないのは、水やりだ。特に夏場。最初は主だった人が中心に、自主的に水やりをしていたが、斜面に６つある花壇を全部まわるのは大変だった。散水用の蛇口は通路沿いに３ヶ所用意され

花殻や雑草を取る花壇の管理作業

専門家を呼んで現地講習

てあるのだが、散水ホースは持ってまわらなければならず、しかも丈夫な30mのホースを購入したので、重かった。結局水やりは日替わりのローテーションを組もうということになり、６つそれぞれの花壇づくり作業を担当したグループが隣り合う２つの花壇ごとに組んで、３チームで自主的に水やりを行うことにした。

年に２回ないし３回は花の植え替えが必要になる。マーガレットや宿根バーベナなど多年草やスイセン、ムスカリなどの球根類もかなり植えてはいるが、やはり季節ごとに華やかなのは１年草の方が多い。花壇ができた当初の春先はパンジーとビオラが花壇を彩ったが、夏前には花が終わる。６月に植え替え作業をして、マリーゴールド、ポーチュラカ、ベゴニア、アゲラタム等を植えた。夏の間ずいぶんきれいに咲いていたが、11月には再びパンジー、ビオラ、葉ボタンなど冬から春の花に植え替える。

●花の知識を増やすため勉強会を実施

「元気にさかせ隊」のメンバーの中には、以前ホームセンターのガーデニングコーナーにいた人もいるが、他は全くの素人。花に関する基本的な知識も得たいということで、６月には専門家として花壇のデザインを行っているプランツプラン円庭の沖本さんを呼んで花の勉強会を行った。美しい花壇の見せ方、手が掛からず管理しやすい品種、日常の手入れなどを一通り講義してもらい、そのあと花壇も一緒にまわった。

現地では、植木ばさみで花を扱いながら、「この高さで刈り込んだ方がいい」「シロタエギクは葉を楽しむので花芽は取ってしまおう」といった具体的なアドバイスをしてもらった。中でも、枯れた葉は、我々はいずれ養分になると思ってその苗の根元に置いたりしていたのだが、これはいけないのだそうだ。枯れた葉に付いた病気は、同じ苗の方にもうつりやすいからだ。もちろんデリケートな花だからの話だろうけど。勉強になった。

きれいな花壇の事例も見たいということで、10月にはレクリエーションも兼ねて、福岡市の海の中道海浜公園の花壇を見に行くことになった。ここは全体としては遊園地のようになっているが、フラワーミュージアム、花時計、花桟敷、バラ園など花壇も充実している。先の沖本さんは海の中道海浜公園の花壇デザインも手がけていたため、現地で説明をお願いした。

●会則を作って会員募集

公園づくり、花壇づくりの目的は、住民と行政のパートナーシップ形成、住民のコミュニティ形成にある。だから一部の人の活動でなく、多くの人に参加してもらうことが必要だった。そこで、会則を作り、会員募集をすることにした。悩んだのは、会費をいくらにするか、ということだった。花苗の費用は町の方で準備できるらしいので、会費は主に連絡等の通信費になる。それ以上は根拠になるものもなく、年会費500円でやってみよう、ということになった。

保険についても課題だった。それまでの花壇づくりの作業日には、レクリエーション保険という、１日単位の保険に入っていた。掛け金は１人１日50円。これは事前に日にちを確定しておく必要があるし、それ以外の日は適用されない。水やりも含め、日常的に個人単位で活動する可能性があるので、年間通して同じ活動に適用されるボランティア保険を活用することにした。これは掛け金１

人年間500円。入会する人が保険に入るかどうかは強制ではなく、入ることを推奨するということにした。しかし、実際には会員に申し込んだ人の大半が保険加入も希望した。年会費とボランティア保険で合わせて１人1000円になる。

会員申し込みは、まず花壇づくり作業に参加したグループ、個人、町職員を対象に受付を行ったところ、81名の申し込みがあった。これとは別に、作業には参加できないけれども応援したい、という申し込みも10名ほどあった。こういう人は保険は必要ない。加入を選択式にしたことに意味があった。その他の一般の住民に対するＰＲはこれからになるが、広報誌でも住民による公園づくりの様子が何度か表紙で紹介されており、多くの申し込みがあることを期待している。

●災害やいたずら、被害にも遭う

今年は台風接近が多かった。梅雨の時期には大雨もあった。レンガの通路は将来やり替えてもいいように砂目地にしておいたのだが、大雨の時に砂目地が流れてしまい、結局モルタルで固めることになった。花壇を結ぶ斜面のスロープには側溝があるが、これが大雨であふれて花壇に水が流れ込んだりもした。台風の時は、いくつかの花が折れていたが、花壇自体に大きな被害はなかった。それよりも、周辺の樹木の葉や竹の葉などが花壇に溜まって、その掃除が大変だった。しかし、それでもすぐに息を吹き返してきれいに花を咲かせるのだから、植物はやはり強い。

子どもたちのいたずらは結構心配していた。地元の中学生などには行いの良くない生徒もいると言うし。大人だって何をするか分からない。花を抜いて持って行くんじゃないか、レンガを外して持って帰るんじゃないか、スプレーで落書きされるんじゃないか等々。ところが、花壇については今のところいたずらなどの被害はほとんど見られない。いつもきれいにしていると、いたずらしにくいのかも知れない。ハーブのローズマリーは茂りすぎたので、少しくらい持って行ってもらってももいいんだけど。

日時計の上でたき火した？

ただ、日時計の方には少し被害があった。どうやら日時計の上、しかもモザイクタイルの壁画の前でたき火をしたらしいのだ。日時計の盤面の一部が黒ずみ、壁画のペンキの部分が少しもろくなっていた。幸い、汚れはこすり落として目立たなくはなった。すると後日、今度は壁面に靴の跡だか自転車のタイヤの跡だか、黒く滑った跡がいくつも付いていた。壁を登ろうとしたのか？こういうよく分からない事ともつき合っていかなければならない。

●いつまでも成長する花壇に

自主管理していく上で、まだまだ課題もある。公園整備のために伐採された樹木でベンチを作ろうというアイデアがあり、丸太を切るところまで進んでいたのだが、役場の公園の担当係から安全上の問題でストップとなった。据え置き型の丸太ベンチを考えていたのだが、誰かが投げ飛ばしたら危ない、斜面を転がして駐車場の車に当たっても責任取れない、というわけである。一方で、公園敷地内では、固定のための基礎を打つような作業は役場で行う工事以外は困る、と言われる。結局解決策が出ないまま、ベンチの件は保留となったままである。レンガに名前を彫ってモニュメントを作ろうという案もあって、レンガも購入していたのだが、これも登ったらケガをするなど安全上の問題でストップとなった。

行政が安全性を気にするのは分かる。住民にも自分たちが作って管理している花壇という意識がある。公園は誰のものか、という考え方にも関わるが、こういうところこそ、住民と行政のパートナーシップを発揮して解決策を見いだしていくことが必要だろう。

花壇は町の中心部の国道沿いにあり、目に付く。花壇がきれいだという声を「元気にさかせ隊」のメンバーも耳にするようで、喜んでいるし、励みになっている。まだ改良の余地もあるし、いつまでも成長する花壇であって欲しい。

（いとう　さとし）

第2回・第3回
市街化調整区域、地域づくり研究会報告

地域集落の活力維持を考えた郊外居住とは？

本田　正明

８月11日と9月24日に第２回と第３回の市街化調整区域、地域づくり研究会を行った。第２回は弊社の糸乗による“田園楽住による地域づくり”、第３回は古賀市土地利用対策室の中野氏による“古賀らしい里地里山居住”のテーマで話題提供していただいた。

どちらとも地域の維持活性化のための新たな郊外型居住の提案だったのだが、敷地規模に対する考え方や事業主体のあり方、居住者をどのように集めるのか、郊外居住のメリットなどについて考え方や意見が異なっていたため、さまざまな角度から郊外居住について考えることができた。

以下ではその概要を紹介する。

●第2回“田園楽住による調整区域の地域づくり”

＜市街化調整区域のコンセプトと目標＞

・これから問題が出てくるのは市街化調整区域なのだが、本当のところで市街化調整区域というのは何なのかはっきりしていない。

・そのため、調整区域のコンセプトと目標ということになると、農村保全と都市開発の二つの視点がでてくる。集落の自立を助けるための開発ということだと、地域振興、集落保全がコンセプトになるし、地域集落尊重型の居住者に来てもらうことが目標となる。宅地開発型という土地開発の視点の場合だと、区画整理事業などの都市住民が取得しやすい宅地づくりが目標となる。

・宅地開発型で農村地域にいろいろな人が移り住んでいるが、そういう人たちが地域の活力を維持する仕組みに乗っかっていない状況である。農村内でバラバラになっている。

・農村では子供なども急激に減っており、集落の自立のためにも、ある程度人口を増やさないと農村がやっていけないようになってきている。消防団や水利のシステムも含めて農村集落をどうやって維持していくかが大きな地域課題になると思っている。

＜集落自立型と宅地開発型の違い＞

・集落自立型と、宅地開発型のコンセプトに基づく土地利用の特徴について考えると、集落自立型の場合は、土地利用の規模は小さくなる。規模が大きいと、集落で矛盾が多くなり、もてあましてしまう。

・60戸ぐらいの農村集落に、45戸ぐらいの住宅開発が２つできているところがあり、そこでは関係が非常にぎくしゃくしている。一方で１戸だけでやってくると、「ここにゴミを捨ててはいけない」などと直接文句はいいにくいが、10戸ぐらいであれば、間接的にものが言えるので都合がいいし、話し合いで折り合いもつけられる戸数だと地元の人は言っている。

・農村の人は情報が非常に狭くなっているので、都市住民は情報の提供でも役に立てる場合がある。

・宅地開発型の場合は、ある程度の規模がなければ、開発業者の仕事にならず、やる気が起きない。10戸程度では儲からないために、どうしても開発規模が大きくなる。

＜集落自立型の地区計画と農業特区＞

・農地転用などといった農地法上の問題が大きいのだが、どのように解決すればいいか、なかなか道筋を見つけられなかったが、新しい農村集落づくりには、地区計画と構造改革特区の併用が良いのではないかと思う。

・農林水産省の構造改革特区では、現在耕作されておらず、引き続き耕作されないと見込まれる農地について特別区域の設定ができるようになっているので、「集落の再生・自立をサポートする」というコンセプトのもとに、耕作放棄農地と集落形成とを勘案して、宅地と10a程度の

発表者の話を熱心に聞く研究会の参加者たち

農地を組み合わせた計画をつくることができると思う。

・集落全体の地域づくりのために１反（10a）農家をつくればいいと思う。通常であれば、５反以上の農地を持たなければ農家になれないが、特区を活用すれば、１反の農地でも農家になれる。

・５反であれば管理が大変だが、１反程度であれば何とか管理できる。雑木や果樹を植え、20坪程度を家庭菜園などにすればいい。宅地は150坪程度でいいと思う。

・宅地では固定資産税、地代がかかるが、農地は殆ど固定資産税もかからないので、若い人でも参加することができる。

・農地取得の下限面積の緩和による"１反農家型"の他にも、１反（10a）以下の農地の貸付をできる特定農地貸付の特区による"市民農園特区型"なども考えられる。本当にこれらの併用が可能かどうかは、市町の都市計画担当者もいるので、検討していければと思う。

＜意見交換＞

・芸術家のような人であればある程度理解できるが、都市住民でこういう住まい方をしたいという人がどれくらいいるだろうか。

・需要量はわからないので、実際に田園楽住の会という会員方式で、農村に移り住みたい人を集めて、計画づくりと平行して事業を進めていくことを考えていたが、実際には役場の協力がないとなかなか進めるのが難しい。特区の申請や地区計画の策定などは役場の人と協力がないかぎりできないので、その担保が取れないと計画が進められない。

・構造改革特区と地区計画の併用は面白いが、行政よりも、地域で一番困っている人が、行政にどうにかしてくれ何とかしてくれという投げかけをし、そのなかで、相談をしながらサポートをしていく形が必要である。行政が先に立って、やれとはいいにくい。

・農村の方から人を呼び込もうといった流れがここ２、３年でだいぶ強くなっている。住宅のことを考えるときは都市計画の面から考えがちだが、農村のことを考えるときは、農村振興基本計画が農村のマスタープランになるので、両方併せて考えると、また一つ考え方ができるのではないか。都市計画といっしょに考えいく必要があると思う。

●第3回“古賀らしい里地里山居住”の提案

＜古賀市の郊外地域の土地利用、都市づくりの方針について＞

・古賀市の都市計画区域外では、人口の急激な増加、狭小過密住宅の建設、虫食い的な乱開発、用途の混在、水質汚濁などの問題が起きている。これらの地域を新たに市街化調整区域に編入し、計画的、段階的に優良なまちづくりを行い、営農環境や自然環境との調和を図ることを考えている。

・市街化調整区域については、豊かな自然や昔ながらの農村集落が残っているが、人口は横這いであり、少子高齢化が進行し、それにともない地域活力が停滞している状況である。今後は、国道３号線や九州自動車道など充実した南北の交通網に加え、東西道路網を整備することにより、格子状の道路網を整備し、営農や自然との調和ある土地利用を図って優良な住居の受け入れによる活力の維持や幹線沿いの有効活用などによって活力の創出を考えている。

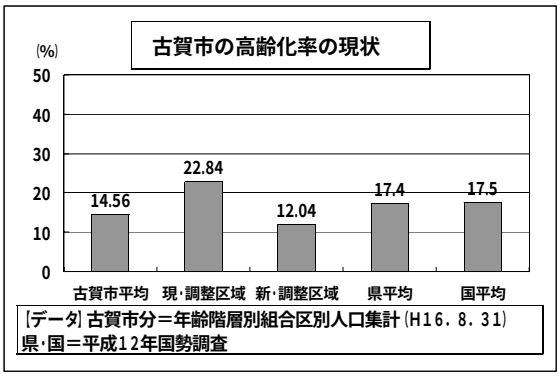
・古賀市は、九州自動車道、国道３号、県道筑紫野古賀線などがあるため他都市との接続性がよく、海、山、川、平野など、地形のバラエティに富んでいる。市街地の身近なところに里地里山が存在しているため、古賀市では「便利でゆとりある郊外居住」が可能ではないか。

・里地里山というのは、手が届くところに小高い野山があり、田畑にほどよく隣接している地域、「山奥の原生林」「植林されている山々」と「市街地」との中間に位置する地域、農村を母集落とする地域であり、市街化調整区域、都市計画区域外の地域で、『古賀らしい里地里山居住』ができないかと思っている。

・そのような地域では、地価も安い上に敷地面積200㎡程度のゆったりとした居住環境が望め、見晴らしの良い山や田畑が身近にあり、浄化槽や公園などの都市施設がある程度整備されている。また祭りや催しなどのコミュニティ活動が盛んに行われている。

・居住者像としては、ほどよい自然環境の中で、ゆとりある住環境や、食の安全性、地域連帯を重視する傾向のある核家族、３世代家族をイメ

田園の中に突如として住宅ができている



現在の調整区域では高齢化が進む（新・調整区域とは、現在の都市計画区域外のこと）

ージしている。

・里地里山居住のあり方については、神社、公民館を含む母集落を中心に優良で集約的な土地利用を図るとともに、集落の外縁部を設定し、その外側でのバラ建ちを抑制するということを考えている。その範囲の中には耕作放棄地も点在しているので、そこに優良な住宅に限り受け入れられないかと考えている。

・市街化調整区域についても、同様の住宅を受け入れたい。またそれに加え、国道３号及び県道筑紫野古賀線沿いで商業系を誘導したい。

・このような集落を形成することで、虫食い的な開発の抑制、将来のコミュニティの維持、無計画な都市施設（道路、公園、下水道、上水道等）の外延化の防止、といった効果が期待される。

・このような取り組みを地区計画制度を利用することで実現したい。

・具体的には、周辺の自然環境や農業環境とのメリハリをつけながらコンパクトな集落を形成し、集落の外縁部を地区計画の区域として設定する。

・地区計画のエリアを決定する際には、集落ごとに「まちづくり委員会」を設置することで考えていきたい。

＜意見交換＞

・地区計画を行うならば、居住者を集めたりするような事業主体を想定しておく必要がある。

・特に事業主体などは想定しなくても、開発できる状態になっていれば、不動産屋などからの情報を通じて、居住希望者が出てくると思う。

・空き家や空き地ができても、子供が地元に戻ることを想定して、土地を売らないという人が多い。また、土地を貸しても戻ってこないと思っている人もいる。

・敷地面積が200㎡程度というのは、狭いのではないか。前原市でも調整区域で駆け込みでつくった開発団地だと宅地は売れていない。調整区域では、利便性だけでなく、暮らし方の魅力がないと人が来てくれないと思う。

・都市に居住している人は、野菜づくりなどに興味を持っているが、なかなか学べる場所がない。逆に農家の人はパソコンのことなどはあまり知らないと思う。そうしたお互いのニーズを満たすような魅力があれば、田園に住みたいという人が出てくるのではないか。

・粕屋町の調整区域では、敷地面積の最低基準である165㎡よりも、さらに土地を小分割できないかという問い合わせも多い。小さい宅地というニーズもまだまだある。

・空いた土地に勝手に居住させると、周りの農家とは合わない“ちぐはぐな”住宅ができてしまい、景観としても良くないのではないだろうか。

●いずれの郊外居住モデルでも、地域づくりをコーディネートする人が必要になるのではないか

提案に対する意見にも出ていたが、郊外居住を進める上で、“事業主体をどこが担うのか"ということが一番重要になってくるのではないか、ということを研究会を通じてますます感じるようになった。

田園楽住の場合だと、戸数は少ないけれども顧客の確保（居住希望者）や地権者・地元との調整などコーディネートの手間が非常にかかるので、なかなか事業収支が合わない。不動産屋や建築設計士など他の部分で収入を上げられるところであれば、営業活動の一部として行うことができるかもしれないが、市場の見当がつかない新しい取り

組みだけに、誰もやろうとはしていないのが現状である。また調整区域の開発になるだけに、地区計画や特区などの法制面で行政の協力が得られるかどうかという点も重要になってくる。

里地里山居住では、できるだけ現在の市場原理を働かせて、従来の住宅需要の延長から生まれるニーズで、自然発生的に開発を呼び込もうというスタンスだと思う。しかし、誰も事業を行うというリスクや責任を負わないので、周りの環境に合った住宅を考えたり、地域の人との近所づきあいをしたりする人が来てくれるというのは、偶然を期待するしかない。里地里山居住の考え方を実践してもらうためには、やはり地域づくりのコーディネーターが必要になると思う。

地域の事情によって、その役割を担うのは、行政だったり、不動産屋や地元の人、またコンサルタントが行う場合など、さまざまなパターンが考えられるが、これから研究会や事業化をしたい地域といっしょに考えていくべきテーマだと思う。自分がそのコーディネーターになれればいいのだが、地域づくりのビジョンを持って、すぐに行動でき、その責任を取れるかと言われるとなかなか難しい。　（ほんだ　まさあき）

自分たちが楽しみながら地域の魅力づくりをしている

糸島地域づくりなんでも相談会第6回報告

本田　正明

●地域の問題は地域に住む人が一番知っている

去る８月22日（日）に芥屋で糸島地域づくりなんでも相談会を行った。２ヶ月に一回ぐらいのペースで、おもしろそうなテーマがあれば開催する、といったのらりくらりとした活動なのだが、気がつけばもう６回目である。つまり１年以上活動が続いているわけで、事務局が毎回、テーマのある地域の地元の人たちにお願いしたり、参加者がお互いに声をかけあったり、無理せず楽しみながら行っているのがよかったのかもしれない。

ややもすると事務所のパソコンの前にかじりつきっぱなしになったり、役場のご用聞きだけに陥ってしまいそうな私が、この会を通じて都市近郊や農村に住む人たちが地域のどんなことに興味・関心を持っているか、地域でどんな問題が生じているか、などを自分で見て、感じて、考えられる貴重な機会になっている。

細い竹が100m以上にわたって密集している

●竹藪に埋もれている防塁跡を地域の自慢の場所に

今回の開催するきっかけになったのは、芥屋地区の地域づくりに取り組んでいるグループが、「普段ゴミ掃除をしている海岸に城跡みたいなものがあるのだが、竹藪で隠れてしまっている。なんとか竹藪を掃除して見られるようにできないか。」という話が出てきたからだった。

志摩町の河口付近はハマボウの自生地になっており、夏には河畔で美しい花を見ることができる。以前はそれほど知られているものではなかったが、ハマボウの会ができたり、毎日付近を掃除する人がでてきたおかげで、今では地元の人たちのお気に入りの散歩道になっている。「芥屋の城跡みたいなものも、いつでもみられるようにきちんと管理してあげれば、地元の自慢にもなるのではないか。」という思いが地域づくりのグループにあった。

当日の集合時間は午前10時。現地につくとすでに、地元の人たちを中心に竹の切り出しが始まっていた。竹藪の幅は100m近くあり、奥行きもかなりありそうである。誰も管理していないので直径５㎝ぐらいの竹が、光の抜ける隙間もないほど密集していた。

私は簡単な作業だろうと思って、Ｔシャツに短パンで、軍手すら持たずに参加してしまったのだが、竹藪の姿を実際に見て初めて作業の大変さを自覚した。軍手や鉈などは地元の人が準備してくれていたものを借りて作業に取りかかったのだが、稲留地区の人がわざわざ大きなチェンソーを２本持ってきていたおかげで、みるみるうちに竹藪が

竹やぶの中からでてきた元寇防塁

芥屋にすむ人がつくっている木彫りの仏像

はれて石垣が出てくる。竹を切る作業はほとんどチェンソーで済んでしまうので、残りの人はみんな切り出した竹を適度な長さにして束ねる作業をするのだが、切り出すスピードが速すぎてどんどん竹がたまっていった。地元の人たちは城跡ではないかといっていたが、海岸沿いに腰ぐらいの高さの石垣が続いていることと、石の組み方をみると、どうもこれは元寇の防塁のようだと思いながらも竹を片づける作業に必死で息も切れてしまって、とてもそうした会話をする余裕がなかった。芥屋の人たちはチェンソーで大量に竹を切り出せるとは思っていなかったみたいで、その始末をどうしようかと悩んでいたが、結局別の日に片づけることにし、石垣の前に束ねて置いておくことにした。

●竹問題は大きなテーマになっている

稲留で火山（ひやま）に増えている竹の管理をどうするかといったテーマでなんでも相談会を行ったことがあるが（67号参照）、竹藪の増加はいろんな地域で問題になっているようだ。竹の切り出しの後、公民館でおばちゃんたちにつくってもらったソーメンを食べながら相談会をしたのだが、参加者には京都のある地区でモウソウチク林の拡大問題の調査資料を持ってきてくれた人がいた。それをみてみると、昭和21年（1946）にはほとんど竹はなく、むしろマダケ林の方が広いくらいである。その後、昭和50年にはマダケ林は駆逐されて、山の40％ぐらいがモウソウチク林になってしまい、平成11年には山の70％ぐらいを覆うようになっている。

糸島の地元の人も自分たちの山の様子とイメージがよく重なるようであり、「ちょうどそのころ、家の裏山にタケノコを取るためにモウソウチクを植えちょった。」「モウソウチクの方がマダケよりも強かったもんな。」「けど、こんなに広がっとるんか。」といった驚きの声が挙がっていた。

稲留では、その問題意識から竹を切り出し始めたものの、どこまで切り出せばいいのか、竹を切り出した後の山は他の植物がほとんど育っていないため、どうやって管理していくか、竹を残していく場所もいるんじゃないか、出てきた竹を処分するだけで活用はできないだろうかといった次の悩みに直面している。一つの区だけの問題ではなく山全体で考えないといけないということで、火山を取り囲む行政区の人たちを集めて竹問題を考える“竹サミット”なども始めている。

これからは活動の目的や目標をつくったり、管理する人が手出しで道具や材料を買わないで済むくらいの収入を得られる仕組みや、一般の人が楽しみながら活動に参加できる仕組みなどを考える計画づくりが必要になっていると感じた。

●“地域なんでもあるあるマップ”をつくったらいいのではないか

なんでも相談会は、地域の問題相談だけでなく人と人との交流が生まれることも一つの楽しみになっている。

今回は参加者が15人程度とやや少なかったが、大工をしている人が参加していたり、木彫りの彫刻をつくっている人もいて、しゃべっているうちに「余った木材などで使えそうなものがあればもらえないですか。」などという話も出ていた。会の後、実際にその方の家まで案内してもらってみせてもらったのだが、思った以上に本格的な仏像で、お釈迦様や仁王像など何点もあった。20年く

らい前から彫り始めたそうで、糸島にはいろんな人がいるのだなと改めて驚かされるばかりだった。

相談会の会話でも、「糸島にはおもしろいことをやっている人や場所がたくさんあるから、それをマップにまとめたら、地域の魅力も高まるし、地元の自慢のタネにもなるのではないか。」という意見が出ていたた。私が知っているだけでも、お茶の配合によってビジネスを起こしたベンチャー会社があったり、海水から天然の塩をつくっている人や農家が料理屋を始めたところ、鶏の放し飼いで卵をつくっている人、ピアノの修理やコンサートも行っているところなど、実にさまざまなものがある。寺山地区では、三体の月が見えるという二六夜待の行事を復活させて、地元の人たちの楽しみづくりをしたりしているそうだ。それにハマボウや防塁なども挙げていけば、相当の地域の魅力発信になるように思う。次の相談会で、ぜひ相談したいテーマである。

（ほんだ　まさあき）

地域ゼミ報告

今までより史跡･遺跡が身近なものに思えた

雪丸　久徳

今回の地域ゼミ（9月10日）は、「太宰府の巨大遺跡「水城(みずき)跡」はどうしてつくられたのか～大宰府や朝鮮とのつながり～」というテーマで、長年にわたって発掘に携わられている城戸康利さん（太宰府市教育委員会文化財課）にお話をして頂いた。今回は、土木や建築の仕事や、山や川などの生態を調査している人など12名が集まったため、歴史に限らず、土木の視点で見た意見や水城の植生に対しての質問など多くの意見が飛び交うゼミとなった。

●大宰府に百済の都が移された！？

まずは水城構築の背景から全体構造について。水城は唐・新羅軍によって滅ぼされた百済の復興に向かった倭国(日本)が白村江の戦いで敗れ、その翌年の664年、敵の侵攻に備えて造られた。しかし一方で同じ年には敵国(唐)に遣唐使を送っている。一見矛盾しているとも思えたが、７世紀東アジアの国々(倭国・百済・新羅・高句麗・唐)は、“右手で握手、左手に剣。喧嘩したり仲良くしたり兄弟みたいな”関係があったようだ。

また、水城は一直線状の土塁単体としてではなく、大野城や基肄(きい)城などの山城と一体となって大宰府を囲んで守る防塁の一部であり、そのルーツは山城や城壁で周りを囲って中を守る「百済の羅城」にあるということだった。

大宰府と百済の関係については、百済の３回にわたる遷都はいずれも南に移動してきていること、土木職人ではなく百済の亡命官人を遣って大野城や基肄城をつくらせたという日本書紀の記事を踏まえて次のような説を話してくださった。それは、『百済の人が、４回目の遷都という意識で、都を九州に移し、大宰府をつくったのではないだろうか。大和朝廷は自分たちの出先と思っている一方で、百済は九州に都を移そうという考えがあったのではないか…』という説である。

この話は仮説であって歴史的に確証されているわけではないとのことだが、大宰府に百済の都があったという思いもよらない逆転の発想に共感している方もいた。

●水城は今でも通用する土木技術だ！！

水城の構造については、水城の発掘現場の写真を交えて説明があった。水城は軟弱な地盤の上に、基礎の滑りを押さえるために樹木の枝葉(敷粗朶(しきそだ))を敷き詰め、その上に粘質と砂質の土を交互に突き固めて(版築工法)つくられていたとのことだった。この部分は、あまりの堅さに発掘時、道具から火花が飛んだらしい。

また水城は、土塁一層あたり約20㎝くらいで積まれているが、今でも土木工事で土を積むときは20㎝ぐらいずつで積まないと崩れてしまうらしい。土木の仕事に携わってきた方が水城構築当時の技術が今の土木技術にも通じていることを追加して説明してくださった。

さらに、今回のゼミでは、水城の存在が1300年の間にどのように変わってきたか、太宰府市の市域の15％を占める史跡遺跡（水城周辺に関しては90％が公有地）の概要について、太宰府市の昭和30年代と平成に入ってからの水城周辺の住宅の状況、高速道路を通す時のエピソード、今後水城の整備をどうするか、といった話題も出た。

私は、今まで史跡遺跡に対しての興味がほとんどなかったが、今回のゼミに参加し、土木技術、自然環境、今後の整備といった今までとは違った

角度から史跡遺跡を考えてみたことで、特別史跡・水城といえど以前より身近なものに感じるようになり、まちづくりの中で史跡遺跡をどう活用するかという視点でもっと水城について調べてみたくなった。

●烽(のろし)火の話しで大盛り上り

その後のディスカッションは、時間内には終わらず、続きは２次会(居酒屋)に持ち込まれた。盛り上がった話の中から、今後の展開としておもしろくなりそうなことをまとめてみた。

①“のろし”ネットワーク(古代光通信システム)

日本書紀に、「對馬嶋(つしま)・壹岐嶋(いきのしま)・筑紫(つくし)國等に防(さきもり)と烽(すすみ)とを置く。また筑紫に大堤を築きて水を貯えしむ。名づけて水城という」(664(天智3)年)とある。664年、水城がつくられた年に、対馬、壱岐、筑紫間では情報伝達手段として烽火(のろし)が使われていたようだ。古代光通信の通信速度はどのくらいか、いったい何を燃やしていたんだ、実際に信号として見えたのか、機能したのだろうか、どういった種類の信号があったのか、考えるほどに興味がわいてくる。「のろし学会」を立ち上げようと会長に名乗り出る方もいた。今後、関連する地域を結んで、古代の烽火(のろし)を再現するようなアクションを起こせないか考えていきたい。

②水城の将来をどうするか

今回のゼミには「私が小学生の頃の遠足は水城だった」という方も参加されていた。当時は目立って大きな木は生えていなくて、そこで多くの人が遊んだりしていたらしい。その方は「最近ではめったに利用されることがない水城だが、もっと活用するべきだし、大きく成長した木は切ったほうがよいのではないか」とおっしゃっていた。それに対して、今の水城は都市緑地としての機能も持っているため、木を切らない方がいいのでは…という意見もあるらしい。

水城に生えている大きく育った木や水城本体そのものをどう整備していくか、あるいは史跡遺跡と住民が如何にして仲良くつきあっていくかを地域の人と一緒になって考えていく必要があると感じた。

史跡だからさわるな、という今までの接し方でなく、折り合いをつけて、活用しながら次の時代に受け継いでいくことを考えて、実践していくことが必要だろう。　　（ゆきまる　ひさのり）

友人、知人に自慢したくなるほど水城の歴史を知る

～水城セミナー第１回報告～

愛甲　美帆

●連続セミナーの第1回が開催されました

前号で、都市再生モデル調査に採択された、「太宰府をとりまく古代の巨大な防塁遺跡の歴史学習、文化交流活動の計画調査」の第１回セミナー（10月16日）を開催した。

新聞の掲載等で参加募集を呼びかけたところ、太宰府市をはじめ周辺市町を中心に62名の参加があった。会場は、10月１日にオープンしたばかりの地域活性化複合施設「太宰府館」のホールで、ここは太宰府天満宮の参道から横路に入った場所にある。当日は午前中に「史跡解説員養成講座」も同じ会場であり、飛び入り参加も９名あった。年齢層は20～70歳代まで幅広い参加があり、男性が７割、女性が３割であった。

●水城は、論争を繰り返してきた

第１回は「水城・古代山城とはなにか～その構造と防衛戦論争の真相に迫る～」と題し、福岡大学名誉教授小田富士雄先生に話をしていただいた。先生は、太宰府史跡や鴻臚館跡の調査研究指導委員会副委員長や鞠智(きくち)城(熊本県)、金田城(長崎県)、鹿毛馬神籠石(かけのうまこうごいし)(頴田町)、宮地岳山城(筑紫野市)調査・整備委員会委員等多くの委員会に関わっておられる。

当日は、水城や山城が作られた理由や歴史の流れ、水城や山城の工法技術などの話とともに最近の調査のスライドを交えながら話していただいた。

・水城というのは他にはない。非常に特殊なものである。むしろ山城については韓国などと研究交流が進んでいる。日本にも韓国にも半玄人のように山城好きの人がいる。1999年に筑紫野市の宮地岳に山城跡が発見されたが、これは大阪の山城ファンがここにあるはずだといってリュック背負ってやってきて１日がかりで見つけ出したものだ。

・日本書紀や續日本紀の記述をみると、水城や大野城、基肄城などの山城が築かれた664年あたりから要所に山城がつくられ690年代の前半には記述にあがっている城の大半はできあがって

お話をしてくださった小田富士雄先生

熱心に聴き入る参加者たち

いた。690年代の終わりになるとそれを修理していたが、８世紀になった途端に城を停止したり廃止したりする記述が出てくる。そのような中、大野城や基肄城は９世紀頃までその役割を果たしていた。また水城は８世紀、９世紀に修理され、13世紀の元寇の時も、もし今の博多湾周辺が占拠され後退してきた時は水城を防衛線にするという話があった。

・水城の寸法について詳しい解説をしたのは、江戸時代の「筑前国続風土記（貝原益軒）」である。高さや幅は書いてあるが、ここに堀があるということは考えられていなかった。木樋は出ていた。

・明治時代、大正時代には水城に関するいろんな論争があった。ダムのように内側（大宰府側）に貯水したという説と外側（博多側）に堀を設けて水を貯えたとする説などである。

・大正２年には、ＪＲ鹿児島本線拡幅に伴う断面の調査が行われた。九州大学の解剖学の先生だった中山平次郎先生が克明に調査されており、大正３年には水城の研究という講演会も行われた。この時、枝葉の鑑定を農学部に依頼されており、この葉は春から秋頃の葉なので水城は春から秋にかけてつくられたということがわかった。その後1975年福岡県の調査で初夏から秋口にこの工事をおこなったということがわかっている（また、この調査で、外側に幅60mの深さ４mの堀が確認され、水の貯えについても決着がついた）。

・1991年阿部義平氏が「大宰府羅城説」を発表された。東西南北四方を囲む羅城があったというのが阿部氏の説である（羅城とは、宮都所在地域の四周を人口の土塁や城壁で囲んだもの）。現在の説は博多側からの侵攻は水城・大野城のライン、南からの侵攻は基肄城・関屋土塁のラインであとは自然地形に頼って防衛したというものである。中国や朝鮮の羅城というのはその中で経済や政治活動をする。しかし、大宰府を含めた平野部で経済活動ができるのは谷間になった狭い場所しかなく羅城で囲ってみても2/3以上は使えない。また短期間の工事でここまでする必要があったのか疑問がある。阿部氏の羅城説は仮説として出されているが、まだ問題が多い。

お話の最後には、スライドを30枚程度見せていただき、西門のあたりや1995年の県道拡幅に伴う春日市の大土居水城の調査で出てきたばかりの木樋の様子など普段はみることのできない水城を見ることができた。

●参加者の声「地域の資源を大事にしたい」

質問では、土木技術や版築工法について教えてほしい、磐井の残党と基肄城の関係は？という質問が出た。また、周辺の住民の方からは「ふるさと水城が整備され、以前に比べるとたくさんの人が訪れている。しかし、台風などの自然災害で堤が崩れている箇所があること、ホームレスが居ついたなどの問題もある。歴史的なところに住んでいるということを認識して何か活動をやれたらいいと思っている」「水城の外堀の復元や散策ルートの設定はできないものか」という意見もあがった。

小田先生は、全国では古代的環境の復元という視点から遺跡を考えるという流れがあり、学者や市民がそれぞれ意見を出しあって整備に反映でき

るものは取り入れていくということや周辺に住んでいる人の意向も組んでいくことの大切さを話された。

先生も関わっておられる、九州歴史資料館、大野城市、春日市、太宰府市で組織している整備指導委員会では18年度まで水城の調査を実施することになっているそうで、その発掘の成果が楽しみである。

●帰りには、水城跡に3～4台の車がとまっていた。参加者の顔もみられた

参加者にお願いしたアンケート結果によると（回収数51票）、参加した動機は、「もともと興味があり、さらに詳しく知りたかった」４割、「歴史に興味があり、水城・古代山城について勉強したかった」３割、「地域の歴史について知りたかった」２割であった。半数近くは、水城や山城について詳しく聞くのは初めての人だったと思われる。自由意見では、「西門にも興味がある」「水城の堀の復元を」「まちづくりに参加するうちに先人達がどんな生活をしていたか知ることも大切だと実感している」などの意見があがっていた。中には「参考になる本があれば教えてください」という方もおられた。

セミナーの帰りに、水城跡の前を通りすぎると、駐車場に３～４台の車がとまっており、セミナーに参加された方の顔もみられた。私もそうだったが、話を聞いて、実際に見に行くとその楽しさが違う。このセミナーに参加した人が、水城や山城について友人や知り合いにもっとたくさん話したくなるようなセミナーとなるようにしたい。

（あいこう　みほ）

皆様から寄せられた「よかネット」へのご意見、近況などの紹介

■公営住宅の管理が応能応益家賃制度になって家賃収入が大幅に減少して大変なことになっている。安全・安心を維持する点検業務が不十分なため、事故が起こっている。このお手伝い（助人）をするため準備をしている。ボランティアで仲間づくりから始める準備である。

９月に第４回写真展（個展）をするための準備中。日本の美しい原風景を守ることにレンズを通して役立てばと思っている。

（兵庫県川西市　髙橋　久栄）

■大学全入時代が近づき、大学冬の時代、大競争時代と言われるなか、平成15年畿央大学は開学しました。幸いにも全国屈指の志願者倍率になり、順調な２年目を迎えています。健康と初等教育をテーマにした小さな大学ですが、広い知識・見識と深い専門的・実践的な力をもつ高度な職業人教育の大学です。

（奈良市　藤原　昭）

■スローフード運動のまちづくりが行われている長崎県森山町で講演会・アドバイスをさせていただく機会がありました。まだまだ完成はされていませんが、自然の豊かさとともに、人の心もなにがしかのゆとりや、将来に対する希望のようなものを感じました。都会（まち）にはない良さが見えかくれして楽しかったです。

（大阪府茨木市　澤　一寛）

■1999年11月に新規就農して、無農薬、無化学肥料で野菜の多品目少量栽培をしています。今年、小作農（借地のみ）から自作農（５反百姓ですが）に変わりました。但し10年くらい耕作放棄されていたため、竹林になったところや、茅の根の多いところが多く、軌道に乗るのはまだまだ先になりそうです。

（長崎県鹿町町　邑本　太一）

■森の街並み環境整備事業は、お陰様で順調に進んでおりまして本年度はポケットパークの整備に向け業務を行っているところであります。Ｈ15年度より事業実施し、町民の目に見えてきたこともあって地域住民の意識も高まってきております。厳しい財政事情ではありますが、10年間で目標を達成し、森地区の振興につなげたいと担当者一同頑張っております。

（大分県玖珠町　合原　正則）

■市内（東大阪市）には、大阪府認証のＮＰＯ法人が５月現在60法人程あり、ネットワークづくりを呼びかけ、６月に26法人の賛同を得て「ＮＰＯネットワーク東大阪」を結成しました。あたらしい「公共」の担い手として、協働のまちづくりを進めるための提言・啓発、そして自己研鑽に取り組むことを確認したところです。

（東大阪市　千葉　武）

■市民体験スクール「菜の花を咲かせよう」プロ

ジェクトがようやくスタートしました。来年の春アイランドシティで‥‥。菜の花畑があらわれる様市民が汗をかきましょう！！一緒に活動してくれる人、一報を。

（福岡市　濱砂　清）

■世紀末初期の時代の中、地球上の様々な地域で、21世紀・新世紀のための創造が、多面的に拡大している事を日々考えさせられます。国家の枠組みではなく、地域の中から市民の立場での自活・連携等の模索が始まらないと、国々の中心である中央政府の制度疲労では展望できない。地域から見直す地域一点中心主義が必要と感じてます。　（福岡市　北一正）

■九州度自己採点集計興味深く拝見。平成17年秋開館の九州国立博物館にこの資料を活用していただいたらと感じました。「小城羊羹」の実力はこのような状況であることを確認でき大いに参考になりました。「歴史」の価値観はやはり現在の生活との関わりについての周知がなされず、学者の方々の探求心の方向に偏りすぎのきらいがあるかと思われます。童門冬二氏的解説が必要な時代なのでしょうか。

（佐賀県小城町　村岡　安廣）

■30年近く続けてきた東京でのシンクタンク活動に区切りをつけ、北海道に移住して、もう五年目をむかえました。一人暮らしの美術館活動とパン作りも少しづつですが板についてきました。この間、「よかネット」は大切な心の窓でした。

（北海道美瑛町　竹川　征次）

■ＮＰＯ法人コミュニティ・エンパワーメント東大阪での理事としての活動とネットの古本屋をやっております。関西大学におられた谷沢永一先生の本で儲けさせていただいております。その他に裁判所からの競売物件の入札の代行業務を行っています。週に１回徹夜になりますが、元気に活動できることを喜んでいます。浄土真宗本願寺派の明専寺で聞法会と仏教壮年会活動を月に２～３回やっております。

（東大阪市　妹尾　精一）

■宿泊施設「母原の里」（厚生労働省の平成15年国庫補助モデル事業として出来ました。）宿泊料金は3､000～5､000円です。一度おいで下さい。

（北九州市　杉谷　岩彌）

足湯もスタンドも盛況です
～対馬市厳原「漁り火の湯」～

山辺　眞一

昨年度、対馬の厳原町で温泉計画をお手伝いしていました。ご存じのように厳原町は対馬島内６町の一つでしたが、６町合併により、今年３月に対馬市となりました。島内には既にいくつかの温泉もあり、厳原町のこの温泉は後発組です。しかし、地元の温泉が欲しいという町民の要望もあり、段階的な整備として、まずは温泉スタンドと足湯が設置されました。

●足湯は町民の憩いと語らいのスポット

足湯とスタンドは、市街地からはずれた町の東部の高台にあり、前方には対馬海峡が見渡せる漁り火公園の上部に設置されています。場所は温泉利活用協議会のメンバーといくつかの候補地を視察し決定したところで、地元の人にとっても自慢したい景勝地で、足湯につかりながら景色を眺め、ゆっくりと楽しめます。私が見に行った日はあいにくの空模様でしたが、既に３人の人が楽しんで居られました。この日だけでなく、毎日定時に足湯を楽しみに来られる人、リハビリのために来る人も多いそうです。本当かどうかは分かりませんが、20年来の痛みがとれた、歩けるようになったという人もいて、お年寄りの中には、わざわざタクシーで来られる人もあり、町民の憩いのスポットに加え温泉の効能を期待している人も多いようで、温泉スタンドの利用拡大にも効果があるようです。管理は、毎朝支所職員がボランティアで清掃をしているとのこと、あまり人のいない所でいたずらする人もいるのではという心配は無くなっ

漁り火の湯･足湯－左に対馬海峡東水道が広がる－

見知らぬ人とも自然と会話がはずむ

漁り火の湯　温泉スタンド

たようです。

●温泉スタンドは大口需要あり

温泉の効き目の評判もあり、旅館などの事業所が１度に1000リットル購入するというところも現れています。10リットル10円ですから一般家庭で利用しても300リットルで300円しかかかりませんが、高齢世帯も多く、持って帰るのには多少苦労しなければならないようです。将来は露天風呂など気軽に家族で利用できる施設も期待されますが、民間のノウハウ導入など、設置運営の工夫が必要と思われます。ちなみに大口需要家からの要望でパイプで引きたいとの話もでているようで、安定的な収入獲得の可能性も出てきました。計画を策定している段階で、いろいろな需要の想定をしていましたが、やはり実際に始めてみないと分からないものです。いまいろいろな提案やボランティアでのサインづくりなど地元の人々の協力も得ながら運営されています。小さく生んで大きく育てる、まさに「漁り火の湯」はこれにのっとって、ステップアップしていくことが期待されます。対馬を訪れることがあったら、是非お立ち寄りください。　（やまべ　しんいち）

漁船団と一緒に海から見た「みあれ祭」

山田　龍雄・伊藤　聡

昨年の５月、宗像大社の沖津宮が鎮座する沖ノ島へ渡り、楽しくも、また清々しい気分にひたることができた。（よかネットNo.64に掲載）

今年は遊覧船に乗って「みあれ祭」をクルージングで見学する機会を得た。この「みあれ祭」の様子は、お酒のコマーシャルでテレビでも放映されている。数百隻の漁船が御座船（沖津宮と中津宮の女神を乗せた船）を取り囲んで、一斉に渡ってくる海上パレードの映像はなかなかの迫力であり、一度は生で見てみたいと思っていた。昨年は所員が海岸から見物したが（よかネットNo.66に掲載）、今年は船から見ることが出来た。

ちなみに「みあれ祭」とは、毎年10月１日から３日までおこなわれる「宗像大社秋季大祭」に先立ち、３女神が一堂に会するため、初日に沖津宮と中津宮の神迎えをする習わしの祭りである。沖津宮は沖ノ島に、中津宮は大島にある。宗像市（旧玄海町）にある、一般に「宗像大社」と呼んで参拝している所は辺津宮（へつみや）である。

●神をお迎えするには時間がかかる

当日、朝５時半に起床、６時過ぎに車を飛ばし、鐘崎にある旅館「海宴」で７時半までに受け付け。旅館のマイクロバスに乗って出発地の神湊（こうのみなと）漁港に向かう。バスには20数人乗っていたが、ほとんどは60代以上の方々であった。８時前には神湊漁港に到着。観光協会がチャーターした遊覧船「鄭和（ていわ）」（通常は博多湾クルージング船、中国明王朝時代の冒険船を模した木造船）と「ヴォイジャー」（開門海峡のクルージング船、宇宙船を模したデザインの遊覧船）に分乗する。定員は２艘で約300人ということだった。私たちは８時20分に「鄭和」に乗船、８時40分に出航。９時過ぎには大島の港近くまで来て、御座船が出てくるのを船上で待つ。やっと９時30分頃、花火が上がり、港から御座船が出てきた。旅館で受付してから２

乗船した観光遊覧船の「鄭和」、普段は博多湾をクルージングしている

雄壮に大漁旗をなびかせ走る漁船の群

時間が経過している。やはり神に出会うには時間がかかることを覚悟しておかなくてはならないようだ。

●観光船には御座船にお供する漁船の親族も乗船

これからが本番。御座船を護衛するように、漁船が大島漁港から続々と出てきて、周りに溢れるように増え始める。漁船は多すぎて数えられない。その日の新聞の夕刊には約400隻と書かれていた。これらの漁船が大漁旗をなびかせ、大島～地島～鐘崎～神湊まで約１時間をかけて海原を突っ走る光景は、まさに雄壮である。遊覧船も漁船団に混じって、抜きつ抜かれつしながら走った。約１時間、甲板から眺めていたが、全く飽きることはなかった。

近くの漁船をみると、結構小中学生の男の子が乗っている。漁師や漁村の人の子どもたちのようだ。こうやって、海の男の魅力を伝えるのだろう。この祭は、３女神の神迎えの祭であるが、参加する漁師と親族のハレの場でもある。ただし３女神の祭だから、神様も女性には嫉妬するということで、漁船には男性しか乗れない。遊覧船が就航しているのは、女性も見れるように、という意味もあるらしい。

●祭りのピークが過ぎて40分間、玄界灘に漂う

漁船群が無事に御座船を神湊にお届けすると、漁港に入る手前で漁船団は一旦止まり、各漁船が御座船の周りを一周まわって、次から次へと自分の港へと帰っていく。宗像七浦といって、周辺の７つの港の船が集まっていたのだ。この様子には、祭の後のもの悲しさを感じるものがある。そして御座船は神湊に上陸する。神湊とはその名の通り、神が上陸する港なのである。

神湊に着いた時点で10時40分頃。しかし、このあと観光船の乗船者は、さらに40分間玄界灘を漂うことになる。これは11時15分発の神湊発大島行き定期フェリーの出航時間と重なり、フェリーが出航しないと観光船は港に入港できないためである。船の揺れも少し厳しくなったので、本を読むわけにもいかず、ただ横になって40分間をひたすら待ち続けた。

この40分間、クルージングと言いつつただ海上を漂うだけでなく、退屈な時間を紛らわせるための工夫ができるのではないだろうか。例えば、宗像大社や沖ノ島のビデオを見せる、あるいは「みあれ祭」の解説をする、近くの勝島を一周するなど。

●まだまだ楽しくなれる、みあれ祭

11時30分頃ようやく上陸し、マイクロバスに乗って宗像大社（辺津宮）へ行き、奉納の舞を見せてもらった。それから旅館に戻り、ゆっくり昼食。食べ終わった頃には13時30分を過ぎていた。

みあれ祭クルージングは、全体的にゆっくりしている印象だ。漁船団と一緒に走る１時間はとても楽しく、充実している。その前後がちょっと長い。昨年、神湊で陸から見た所員は、漁船団が港に近づいたところから上陸するまでしか見るところはなく「すぐに終わった」と言っていた。この中間的な時間の過ごし方ができないかと思う。昨年は、食事なしのクルージングだけというのがあったそうだが、今年のクルージングは全て宿泊または食事付きになっていた。観光協会の方によると、まだ試行錯誤しているということだった。旅館にもよるが、食事付きで６千円前後というのは決して高くない。それくらいは楽しめたと思う。

その他、思い付いたことを挙げると、遊覧船の中では漁村のおばちゃん達が料理やつまみを売ったらどうだろう。乗船客は結構ビールを飲んでいたし、時間も十分あった。それから、新聞社などの報道機関はずっとヘリコプターを飛ばしていた。新聞やテレビのニュースで見る空からの映像が体験できるなら、遊覧ヘリコプターも需要があるのではないか。海上パレードの時間は限られているが。

みあれ祭は、まだまだ楽しくなる要素がある。

（やまだ　たつお、いとう　さとし）

まち歩き

周りにお堀が2重、3重に取り囲んでる古墳
～御塚（おんつか）・権現塚（ごんげんつか）古墳～

山田　龍雄

まちづくりの仕事には、現地調査が必要となる。この時には、よほど興味がないとあえて訪ねないところに行って、思わず感動するものに出会えることがある。これが、この商売の楽しみの一つでもある。

今回、筑後川舟運事業の関係で船と筑後川沿いの観光資源とをつなげられないかということで、筑後川周辺の資源を見て回った。

この時に出会ったのが、「御塚古墳」と「権現塚古墳」であった。一般に古墳や歴史史跡に興味がないと、久留米市の大善寺まで行って見てみようと思わないものである。しかし、この古墳は九州では数少ないといわれている周濠（古墳の周りを堀が囲んでいるもの）古墳でなのである。上空から撮った写真をみるとタイヤの車輪みたいにみえる。この古墳は５～６世紀に三瀬郡一帯を治めていた「水間（水沼）君」の一族のものといわれている。

上空から見た2つの古墳（公園の中にある看板）

県道23号線に接しているのが御塚古墳で、後円の直径約65m、高さ約10mで３重の周濠が取り囲んでいる。また、道路より少し奥に入ったところにあるのが「権現塚古墳」で、この直径は152m、墳丘の部分の直径は約56m、高さ９mとなっている。権現塚古墳の方がひと周り大きい。

当日は、日差しも厳しく歩くのもおっくうな感じであったが、この周壕の土手には木々が茂り、中にはいると堀に水が溜まっていたため、ひんやりして気持ちがよかった。昔の人は、人の侵入を防ぐため２重、３重の堀を巡らせ、このような快い空間の古墳をよく創ったものだと感心しながら一周してしまった。この古墳は西鉄大牟田線の大善寺駅から徒歩10～15分のところにある。

また、この古墳の隣敷地に「空」というギャラリーと喫茶店と衣料品や小物類販売店を兼ねたお店がある。ここは、現在経営している人のお父さんがアトリエとして使用していたのを改装したとのことで、天井も高く、外からみた以上に開放的

墳丘の一番内側にあって水が貯えられている堀

外からは何の店かわからない「空」（喫茶・衣料品等販売・ギャラリー）の店内

な空間となっている。

最初は何のお店であろうかと思いながら、ふと立ち寄ったのであるが、快くお茶をごちそうしていただいた。この古墳を訪ねることがありましたら、このお店にも立ち寄られることをお奨めします。　（やまだ　たつお）

まち歩き

千年家の“法燈”と独鈷寺の“独鈷･鏡”

－福岡県新宮町－

糸乗　貞喜

千年家（横大路家住宅）には、千年以上昔から灯し続けられている“法燈”があるということは聞いていた。そして10年前に一度訪ねているが、それを見せていただいたのは今回が初めてであった。

実は10年前、「横大路家は気むずかしいから」という人がいて、千年家の家の前で立ち止まり、逡巡して様子を見たりしながらあきらめてしまった。そんなわけで独鈷寺だけ訪ねたのであった。独鈷寺には、伝教大師（最澄）が中国留学時に持ち帰った“独鈷”があり、ご住職から古い話を聞きながら、独鈷を手に取らせて見せていただいた。

「聞くと見るのは大違い」ということわざは、極楽のように聞いていても、実際にいってみると地獄のようだったりするという意味だが、今回の場合はその逆であった。誰もいない曲り家に入って、屋根裏を見上げたりしていると、腰の曲がった老婦人が帰ってこられて、経緯を訥々と話された。

「この千年家というのは、伝教大師(最澄)が中国で修行をしておられたとき、法燈をともして励みにしておられたときの火を持って帰ってこられて、それをこの家が毎日経やさんようにして来たんです。今も毎日朝晩燃やして、灰をかぶせて消えんようにしています。それで千年家と言われるようになったんです。」

竈は、確かに暖かく、中にこんもりと灰が盛られていた。

「最澄さんはここの浜に帰ってこられて、布教するための場所を探そうとして、持って帰られた独鈷と鏡を空に投げられたんです。するとそれが光を放ちながら、立花山の方へ飛んでいったんです。そこが今の独鈷寺です。そこに寺を建てる間中、このうちにおられたんです。」

「この家を出発するときに、中国以来の“法理の火”を授けなさったんです。この火を護っていけば家が絶えることはないと、いってくださったんです。この火を絶やさんために家を空けることはできんので大変ですが、44代まで続いて来ていますし、孫も男の子が授かっていますので、ずっと男で46代まで続いているんです。」

これ以外にも建物(曲り家)の話、先祖の話、井戸の話など、盛りだくさんの話を聞かせていただいた。「気むずかしい」どころの話ではなかった。最澄が帰国したのが805年であり、修業中から灯しておられたとすれば、丸々千二百年続いていたことになる。その火の温かみにふれて、ゆったりとした気分になれた。

次は独鈷寺。

小さな寺である。「拝観されたい方はご連絡ください」と書いてあったので、母屋の方でお願いした。老婦人が本堂をあけてくださった。

「実は私は７～８年前に伺って、老住職にいろ

千年家（横大路家住宅）　パンフレットより

右側の灰がはみだしている中で炭火が燃え続けている

独鈷寺の入口

独鈷と鏡

いろ話を聞かせていただき、独鈷も見せていただいたんですが……、今日は三人で来たので」といったところ、「そうですか、住職は二年前になくなりました。」「いやあ、それは、元気で話好きの方だったように思いますが……」この辺りから急に空気が和んだ。

それから、この立華山明鏡院独鈷寺といって立花山の麓に建てられた話、最澄の話、最盛期には立花山に31院、西山に４院、東山に１院あわせ36院からなる大寺院だったことなどの話を聞かせていただきながら、独鈷と鏡を見せていただいた。

「立華山明鏡院独鈷寺之由来」という寛政八年の文書のコピーもいただいた。そこには「伝教大師……帰朝ありける本州に着岸ありて壇鏡と独鈷を虚空に放て法を弘べき相応の地を試み玉うに其の鏡の光虚空に輝き独鈷とともに飛び去りたりと……」この地の由来が書かれている。

千年家と独鈷寺あわせて、一時間半くらいだったが、ゆったりとした楽しい時間であった。

※独鈷：天台宗などの密教で銅または鉄製の両端のとがった短い棒。手に持って、煩悩を打ち砕く意を表す。　　（いとのり　さだよし）

『日本の川を蘇らせた技師デ・レイケ』
著者　上林好之
草思社

今年の４月に初めて筑後川から有明海への遊覧（本誌５月号に掲載）を行ったときに、筑後川の河口に「デ・レイケ導流提」なるものがあり、明治時代に日本で河川改修を数多く手がけたヨハニス・デ・レイケという人がいたことを初めて知った。この導流提は明治23年にデ・レイケの設計で作られたものである。河川の土砂堆積を防ぎ、自然の川の流れだけで水深を保ち、船舶の行き来をスムーズするために河川中央部、約６㎞に渡って石垣を積み上げたものである。干潮時に姿を表し、河川の曲線に沿って築かれている石垣の線はなかなか美しい。

この石垣を見なければ、小生はこの本をあえて手に取って読んでみようと思わなかっであろう。

読んでみると、デ・レイケという人が、岐阜の木曽三川（木曽川、長良川、揖斐川（いびがわ））を始め、大阪の淀川、福井の九頭竜川（くずりゅうがわ）、三国港など我が国の主な河川改修や港湾工事など、多くの仕事に携わってきた人であったこととか、当時と河川計画・工事におけるイギリスとオランダとの競争の様子など、単に技術的な話だけではなく、明治時代のお雇い外国技師の待遇や政府との駆け引き状況など、なかなか多彩で面白い。

筑後川導流提のことについて、本著では数回しか出てこない。私の推測ではデ・レイケは、筑後川には数回ぐらい来て、基本的な方針を決めたのち、後の設計と工事は日本人の誰かに任せたのではないだろうかと思う。本人が忙しかったこともあるが、明治20年ごろには日本人の手で河川工事を手がけたいとの要望もあったらしく、設計者や工事管理責任者に日本人を登用させている。筑後川の着工式にデ・レイケの名前は残っていないらしいことが書かれている。

この本の著者は、学者やノンフィクション作家でもない。著者は中部地方建設局河川部長を退職

筑後川河口でみられるデ･レイケ導流提（パンフレットより）

したのち、デ・レイケの研究を生涯のテーマとし、オランダ語を独学で学んだいうから凄い。自らオランダに出向いてデ・レイケの指導者であったエッシャーとやり取りした膨大な手紙をエッシャー家に出向いて調べるなどして、デ・レイケをはじめ当時の河川土木工事のことを書き上げているのである。この本の中で、面白いエピソードを２つ紹介しよう。

●「これは川ではない滝である」の真意は？

このフレーズは、デ・レイケが富山平野を流れている常願寺川の視察に行ったときに、あまりの急流のために思わず言ったとされ、『日本の河川は急流であり、西洋の河川と違っていて洪水の原因となるのだ』という意味を簡潔に伝えた逸話として有名である。

しかし、著者は通訳者が、デ・レイケの本意を伝えず、間違って伝えているという。つまり、デ・レイケは常願寺川の流れが滝のように急流であることに驚いたのではなく、滝があるかないかに関心があり、常願寺川での洪水被害が大きいのは「常願寺川では滝が少ないことからエネルギーが放出できず、そのうえ河床勾配が急であることから流速が大きくなることにある」と伝えたかったのである。これを富山県の職員が単に「滝のように急流に原因があるのだ」と情緒的に表現してしまったとのことである。

●デ･レイケの上司であったエッシャーの子供は？

明治６年に来日した当初のデ・レイケは、四等工師として地位の低い技術者として雇われており、当時、一緒に来たエッシャーは一等技師であった。そのエッシャーは、親族の不幸のため明治11年に帰国している。デ・レイケは、専門的な知識が乏しかったことから技術的なアドバイスや家族のことなど、20数年間にわたってエッシャーに手紙で相談している。この本が書けたのもこのエッシャーとの往復書簡が残っていたことによるのである。

このエッシャーには５人の男の子がいて、次男はベーレント・ジョージ・エッシャーという地質学の大家となり、末息子が「だまし絵のエッシャー」として有名なM・C・エッシャー（マウリッツ・コーネリス・エッシャー）として知られ、今、ハウステンボスに展示館がある。

（山田　龍雄）

編集後記

■今回のよかネットには新シリーズ“まち歩き”を２編掲載しています。街を歩いていて、面白いと感じた場所、仕事の帰りにふと立ち寄って、これは凄いと思った歴史資源、あるいは素敵なお店などを、今後ともご紹介していきたいと思っています。「ここは是非見ておいた方が良い」といった処がありましたら、ご紹介ください。また、11月から「福岡・博多まちあそびの会」を始めます。キャナルシティやホークスタウンといった商業地としての観光スポットだけではなく、歴史をひもとき、日常的に遊べる場所を参加者と一緒に再発見したいと思っています。（だ）

■今年からダイエーファンになり、福岡ドームへ十数回足を運び、最後の最後に観たものは西武の胴上げでした。その後、球団の売却問題浮上。ただ、近鉄に比べるとダイエーは買いたくなる球団を作ったのでは？と思います。が、売却となれば、今年購入したグッズの数々が･･･来年すべて買い直し?!泣けてきます。（さ）

よかネット　No. 72　2004. 11
（編集・発行）
㈱よかネット
〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号
福岡パールビル8階
TEL 092-283-2121　FAX 092-283-2128
http://www.yokanet.com
mail:info@yokanet.com
（ネットワーク会社）
㈱地域計画建築研究所
本社　京都事務所　TEL 075-221-5132
大阪事務所　TEL 06-6942-5732
東京事務所　TEL 042-501-2531
名古屋事務所　TEL 052-202-1411
㈱地域計画・名古屋